

〔翻訳〕

## 郭沫若「カルメラ娘」訳注（上）

張 琢 月

本稿は郭沫若「カルメラ娘」（原題は「喀爾美萝姑娘」）の訳注である。郭沫若は、『東方雑誌』第22巻第4期（1925年）に「喀爾美萝姑娘」を発表。郭沫若は後に改訂<sup>\*1</sup>を加えており、『郭沫若全集』文学編・第9巻（人民文学出版社・1990年）には改訂稿が収められている。

〔凡例〕

- ・底本には『郭沫若全集』文学編・第9巻（人民文学出版社・1985年）（以下、「全集本」と略称）を用い、『東方雑誌』第22巻第4期（1925年）（以下、「初出本」と略称）を参照した。
- ・全集本と初出本の異同は、注釈に示した。ただし、記号の変更（「。」→「！」）や文意が大きく変わらない改訂については省略した。
- ・補注は注釈に示した。なお、郭沫若の自注については、「郭沫若の自注」であることを明記した。

### カルメラ娘<sup>\*2</sup>

郭沫若

別れてから二ヶ月近くが経ち、あなたからはたくさんの手紙をもらっているのに、私からはまだ一通も返信したことはありませんでした。私がこちらに来る前、あなたに話していたのは、電機工場で実習をするつもりということでしたが、実はそれはただの口実で、可哀想にもあなたは私に騙されておりました。あなたはきっと実習が忙しくて手紙を書けないのではないか、ハガキ一枚でも書いて安否だけでも伝えてくれればいいのにと思っていたかもしれません。——ああ、友よ、君のように私を愛

---

\*1 「喀爾美萝姑娘」がいつ改訂されたか詳細は不明であるが、1926-1947年の間に郭沫若自身が改訂している。

\*2 初出本には「喀爾美萝姑娘（Donna Carmela）」とあり、全集本では「喀爾美萝姑娘」と改訂。

し、気に掛けてくれる人を、私は騙してしまった。私は自分の退廃的な性質や偽りの多い行動をじっと見つめ、自分でさえ自分のことが哀れに思えてくる時があります！

私はまるで一本の燃え尽きそうなロウソクであり、燃える炎は我が身を焼き尽くし、まもなくこの微かな炎は消えるでしょう。中国に置いてきた妻子は君がよく面倒をみてくれており、私はとても感謝しています。彼女らを棄ててしまったことは、とても悲しいが、どうしようもありません。私の瑞華はあなたをご存知の通り、苦しみに耐えることができる女性です。私がいなくても困難を乗り越えて子供を育てることができます。むしろ私がいたら彼女の負担になることでしょう。彼女に対しては、聖母マリアを敬うのと同じように、尊敬の念を抱いています。しかし、彼女の夫として、私はとても賤しいのです！とてもとても賤しいのです！\*3 彼女は常に神聖な光のもとで生活をしており、彼女の輝きは私を苛む刑罰です。彼女の前にいるといつも苦しくて、私の自我意識は、彼女と私の間に遠く及ぶことのできない遥かな隔たりがあることを痛感しております。友よ、私と彼女との結婚は、ある意味で悲劇だと言えるでしょう。

私はこちらに来るまで、瑞華には一通の手紙も書いていません。彼女も当初はあなたの様に、私が真面目に実習をしていると思いき、私を励ますたくさんの手紙を書いてくれました。最近、だいたいのことはS夫人が彼女に伝えてくれたので、彼女も私がまた退廃的な生活をしていることを知りました。瑞華の最近の手紙によると、私と離婚することを願っており、生活を改めることができるならば、私が愛する人と結婚することには反対しないと言いました。ああ、これは彼女がいかに高潔な心を持ち、そしていかに傷つき絶望したかということを示しています！彼女はもう私のことを愛してはいないが、彼女が私を可哀想だと思いき、助けたいとも思っていることが分かりました。彼女が私を助けたいと思う心は、あたかも父母が出来の悪い子供を助けたいと思うのと同じでしょう。彼女はあらゆる方法を考えたが万策尽きました！彼女の大変な苦心を思うと、ただ泣きそうになります。また彼女は自分で子供の面倒をみるので、決して私の世話にはならないと言います。私の息子と娘がこのような母親に恵まれたことを、ひそかに祝福しています。自分の無責任さを思うと、恥ずかしさのあまり、この大地に足の置き場もないくらいです。でも私にはどんな方法がありましようか？ 私は自分の心身に対してさえ責任を負うことができない人間であり、子供たちのことを何か言えましようか？ 子供の教育は、私から見ると、父親がいる必要はありません。昔から秀でた詩人、芸術家、さらに聖賢・豪傑は、ほとんどが母親に育てられた人ではないですか？ 私はこのことを思うと、常に納得しているのです。ただこれは私のような無責任な父親だからこそ言える話であり、友よ、私を許して

---

\*3 初出本には「我是太卑下了，我的人格是太卑下了。」とあり、全集本では「我是太卑下了呀！太卑下了！」と改訂。

ください。

私の瑞華は、いつも友人の前では私の短所を隠してくれます。彼女の目的は、私のことを彼女が作った理想的な人格にしたてあげることです。私もしっかりと努力することを余儀なくされますし、実質上、無理矢理彼女が作った理想的な人格になっています。しかし彼女の計画は失敗に終わりました。彼女は私に偽善者を演じさせました。友人たちが思っている私は、本当の私ではなく、ただ瑞華が演出した私の幻影<sup>\*4</sup>です。正直に言うと、本当に友達といえる人には私には一人もいないでしょう。自分の内心世界を包み隠さずに告白すれば、おそらくすべての友達は容赦なく私のことを罵り、軽蔑するでしょう。おそらく君も同じだと思います。いまこの手紙を書いたら、あなたに幻滅の悲哀を味わわせることになってしまうのが、本当に心が痛いです。我々二人は知り合い、仮面を通してキスしただけですが、それがこんなにも心痛ましい事実なのです！ この手紙を送ることを決意するまで、かなり時間がかかりましたが、いま私の内面をあなたに暴露します。それは私の妻、すなわち私の憧れるマリア様への明確な裏切りです。しかし私は仕方がなく、いつわりのない気持ちを追求するしかなく、瑞華が作り上げた私の偶像を破壊せざるを得ません。彼女は必ず私を許してくれることを知っています。彼女を裏切りましたが、彼女に対する崇敬の念はまったく失われていません。

世間の移り変わりは、誰も予測できません。ただ二年間の歳月を思い出すと、この二年間の人生は本当に一落千丈の急変でした。二年前、私はF市<sup>\*5</sup>の工科大学の二年生でした。三月の最後、第二学年の試験が終わり、学校も春休みに入りました。休み中は私たち学生が最も楽しい時間です。機械的かつ強制的な授業から解放され、自分の時間を自分のやりたいことに費やすことができます。私は特にほかの趣味がなく、小説を読むことが好きだけでした。休みになると、毎日午後F市の図書館へ小説の原本か訳本を読みに行きます。夕方に帰ると、照明の下で瑞華に読んだ本の内容を解説しました。私たちは穏やかで幸せな夫婦二人だけの時間を過ごしていました。ある晩、たまたま何かの小説の話となり、そこには女性の美しい睫毛が描写されていました。瑞華から、花壇巷<sup>\*6</sup>にあるカルメ

---

\*4 初出本には「写真」とあり、全集本では「幻影」と改訂。

\*5 F市 おそらく福岡（Fukuoka）市のこと。郭沫若は1918年9月から1923年3月まで福岡市の九州帝国大学に留学していた。

\*6 花壇巷 花壇公園のある通り道。花壇公園については未詳であるが、当時の郭沫若の住まい近くにあった「箱崎花壇」のことか。「福博電車沿線名所案内」（明治43年・1910）には八幡宮と工科大学の間に「箱崎花壇」が見え、「最新実測福岡市街全図」（大正3年・1914）の「福岡市案内」には名勝のところに「箱崎花壇 市外箱崎東三十丁」とある。

ラ屋<sup>\*7</sup>の娘の眼がきれいで、睫毛がとても濃いと教わりました。瑞華は最初、その娘を見た時、カルメラ屋の娘とは思わなかったそうです。S夫人がある時、その娘を尾行し、住所を突き止めました。瑞華は淡々と言いました。彼女は何も意識しておらず、私もいつもの日常雑談として聞いていました。しかし、誰が知っていたでしょう、このわずかなひび割れから、激しい火山が噴火することになるうとは！

私の住まいはもともと市外のH市<sup>\*8</sup>の海岸沿いにあり、住まいから図書館まで電車に乗っていきます。最寄り駅と花壇巷と私の家とは、ちょうど正三角形の頂点に位置しています。翌日の午後、図書館に行く時に、好奇心に駆られ、回り道をして花壇巷に行ってみました。「花壇」というのは小さな公園でして、私の住まいからは本来それほど遠くありません。3、4分も歩かないうちに花壇巷の小路に着きます。この通りは、何度通ったか分かりませんが、今までカルメラ屋のことを気にしたことがありませんし、この通りにそんな睫毛の美しい少女がいることも気づいていませんでした。友よ、カルメラなんてものは、きっと分からないでしょう<sup>\*9</sup>。瑞華から聞いたところ、これは子供に食べさせる甘いお菓子で、砂糖であぶって作ったものです。形はダルマ、西洋の子供人形、人魚、果物など、いろいろとあります。その上に、金色・朱色などの色を塗れば完成です。饅頭の形をした甘いお菓子もあります。こぶしサイズのものであれば、銅貨一枚で買えます。このような物は花壇巷で見たことがないだけでなく、十年間日本に住んでいますが、ほかのところでも全く見たことがありませんでした。人の注意力は結局のところ散漫であり、その物を凝視するのでもなければ、物の姿は意識の中に入ってきてません。花壇巷を歩いて行くと、通りの入口の東側に飲食店があります。店のドアの前には垂柳があり、若芽は淡い黄色に色づいていました。西側にはH村<sup>\*10</sup>のぼろぼろの公会堂があります。公会堂の両側を注視すると、南側にある貧民街に意識が向きました。通りに面した一軒家の窓の前には、二つの古い木製の箱が並んで

---

\*7 カルメラ屋 カルメラを売っている店。カルメラ（原文は Karuméra）について、郭沫若の自注には「喀爾美萝（カルメラ）。砂糖を加熱して溶かし、発泡させた甘いお菓子のこと。後文に説明がある。」とある。

\*8 H市 後出の「H村」と同じであれば、箱崎（Hakozaki）村のことと推定できるが、H市とH村が別であった場合、H市は博多（Hakata）のことか。なお、初出本は「我的寓所本在市外的H海岸上」とあり、全集本は「我的寓所本在市外H市的海岸上」と改訂。初出本に「H海岸」とある方が分かりやすく、その場合ここは「H海岸」（箱崎海岸・箱崎浜）のことで、H村は箱崎町のことと推定できる。

\*9 初出本には「竟連 Karuméra 這樣東西我也不曾見過。」とあり、全集本では「朋友，Karuméra 這樣東西，我怕你不会知道罷。」と改訂。

\*10 H村 おそらく箱崎（Hakozaki）町のこと。日本の行政区画である「町」を「村」としたか。

いて、その箱の周囲と上部にはガラスがはめ込まれています。ガラスを通して、箱の中には軽石のような甘いお菓子が入っているのが見えました。箱の後ろの障子は固く閉まっています。<sup>\*11</sup> ここが彼女の住まいです。向い側のお宅の小さな庭には、ピンク色のサザンカが咲き誇っていました。通りには誰もおらず、一匹の白い犬が前の道路にうずくまっており、人の足音を聞くとゆっくり立ち上がって反対側に向かっていきました。私は窓の外で躊躇しました。メンツを棄てて甘いお菓子を買いたいのですが、でもやはり恥ずかしい。大学生の制服を着ているのに、厚かましくも子供向けのお菓子を買おうとしているのです。彼女が顔を出したならば、私の浅ましい考えが彼女に見透かされてしまわないだろうか？<sup>\*12</sup> しかし最終的に私の好奇心は羞恥心に勝ち、通りに誰もいないうちに、窓の前で決意して、声を控えながら叫びました。

——「ごめんください、ごめんください、甘いお菓子をください。」

自分でも思わず笑ってしまいました。私の叫び声がまだ止まないうちに、窓の中から返事が聞こえました。ああ、なんて彼女の声はしとやかなのでしょうか。<sup>\*13</sup> 地方ではあまり聞いたことがありませんでした。障子がゆっくり開き、ある少女が顔を半分出しました。私はびっくりして身震いしました。彼女の眼を思い出すと、今でもあの時の身震いを感じます。ああ、あなたも見てみてください、見てください、彼女の眼を！ ああ、見てください、あれは言葉で形容することができません。文字で形容することもできません。彼女の眼はなんと黒々として、なんときらきらして、なんとしとやかであることでしょうか。彼女は私をみると、すぐに視線を下に向けました。長い睫毛はあんなにも美しくはっきりしており、またあんなにも生命力にあふれております！

ああ、私は自分が詩人でないことが恨めしい！ もし私が詩人であれば、彼女の美しさを何分の一かでも形容できたのに。ところが、ところがです。私は心の中の発想を文字に書けず、言葉にも表現できません。ああ、私は自分が画家でないことが恨めしい！ もし私が画家であれば、彼女を描いたのに。彼女は座ったまま破れた障子から顔を半分のぞかせ、下を向き、きゃしゃな姿で、下のまつげは半開の六月菊花のように趣き深い。その姿を完璧に描きあげたい、完璧に描きあげたいのだ！ ああ、彼女の濃い黒髪！ ギリシャ式の髪型に、スペイン式の髪飾りが見えました。私は想像しました、空高く飛ぶ鷹が鳩の雛を見つけた時のように、手を伸ばしてしっかりと彼女を抱き締めることを。私は彼女の眼に、顔に、

---

\*11 初出本には「紙窗是厳閉着的」とあり、全集本では「匣后的紙窗嚴嚴閉着」と改訂。

\*12 初出本には「我的醜劣的心事也要被她看透了。」とあり、全集本では「我的醜劣的心事不也要被她看透了吗？」と改訂。

\*13 初出本には「声音是十分嫵雅」とあり、全集本では「啊，她那十分嫵雅的声音哟」と改訂。

全身の皮膚の上に、千回でも一万回でも狂おしいほどキスをしたかったのです！私の心はこれ以上ないくらい乱れ、血が胸に沸き立ち、言い表すことのできない異様な焦燥を感じました。——友よ、あなたには言ってしましましょう。私は本当のところ彼女に対して抑えがたい淫欲を起こしていたのです。ああ、私の悪念、私の悪念<sup>\*14</sup>、きっと彼女に見透かされてしまった！彼女は眼を下に向け、顔は耳まで赤くなっていました。かわいらしい処女の恥ずかしがりようでした！人を狂わせるほどの恥ずかしがりようでした！ああああ……、彼女はおずおずして少しの間ものが言えず、ゆっくり眼を上に向けると、私に何個買うかを訊きました。彼女の声はかぼそくて、少し震えています。私が持っている1銭銅貨をすべて出すと、彼女はとまどいながら受け取り、指も少しふるえている様子でした。彼女は立ち上がって向かい側の箆筒まで行くと、引き出しから新聞紙で作った紙袋を取り出しました。箆筒の傍には髪が真っ白な老婦人がいました。おそらく八十歳は超えており、彼女の祖母だと思われます。彼女が甘いお菓子を渡した時、私は思わず彼女の指先に触れてしまい、彼女は慌てて手を引っ込めました。彼女は小声でありがとうと言いました。<sup>\*15</sup>ああ、彼女のありがとうの声！私の何に感謝するのか？彼女は障子をゆっくりと閉めました。——ああ、月は雲の暗いところに進んでしまいました！<sup>\*16</sup>

私は一包みの甘いお菓子を持ちながら彼女の窓の前から離れました。でも、私はどこに行くべきでしょうか？<sup>\*17</sup> 図書館は、行きたくありません。もう行くことができません。私が出かける時、瑞華は銅貨1銭をくれましたが、それは往復の電車代だったはずです。それをすべてカルメラ娘に捧げたので、図書館に行くこともできなくなりました。我が家の家計はすべて瑞華が管理しています。月々の生活費は私がもらえる数十円の奨学金だけでまかなっているのです、支出を節約しなければなりません。私の小遣いも完全に瑞華からもらっています。私は一包みの甘いお菓子を持っているので、もはや家に戻って瑞華に会うこともできません。私の心の中では、瑞華は恐怖の対象となっていました。私は躊躇しながら、通りにある花壇公園に入り、池のほとりの石に腰かけました。池には枯れた蓮の茎だけが少し残っていました。今はカエルの発情期でした。いくつものつがいとなったカエルたちが、片方をおんぶしながら池の上を泳いでいます。私は彼女の

---

\*14 初出本には「悪心」とあり、全集本では「悪念」と改訂。

\*15 初出本には「她还轻轻地道了一声多謝。」の一文がない。

\*16 初出本には「——啊，月亮進了曇後的黑暗喲！」の後に、「我是失了魂，失了魂！这便是我第一次见她的光景。」とある。

\*17 初出本には「我抱着一大包糖餅走向甚麼地方去呢？」とあり、全集本は「我抱着一大包糖餅離開了她的窗前，但我走向甚麼地方去好呢？」と改訂。

ことを思いながら、甘いお菓子を口に含みました。お菓子は蜂の巣のように、噛んだら砕けていきます。彼女の睫毛を想像しては甘いお菓子を口にし、また彼女の恥ずかしそうな様子を想像しては甘いお菓子を口にしました。さらに彼女の顔を想像し、左の口元にあるホクロを想像し、彼女の全身をすみずみまで想像しては、甘いお菓子を七個続けて食べたのです。袋の中にあるお菓子は減っていないかのようで、中身を確認したらまだ五つ残っていました。ああ、これは二つ多かった。これは絶対に彼女が数え間違えたのです。たしかに、彼女が数え間違えたのです。――友よ、日本の一円紙幣は銅貨十枚と交換できるのです。<sup>\*18</sup> 私はまるで何かをひらめいたかのように、飛び上がって彼女の窓の前に走って行きました。

――「すみません、すみません、お姉さん、ちょっと出てきてください。」

彼女はすぐ返事をして障子を開き、私を見ると頭を下げ一礼しました。

私は言いました、「お菓子が二つ多かったので、数え間違えたのではないでしようか？」

彼女は顔を赤くしながら答えました、「間違いではないです。それは、……その……何個か小さすぎるのがあったからです。」

ああ、友よ、心を動かされないででしょうか？ こんなにも優しい心遣いに、君も心動かされないででしょうか？ これが利己的な商売人の心でしょうか。これが貧民街の娘が持つ心でしょうか。なんと我々の心を動かす優しい心遣いでしょうか？ 彼女のこんなにも綺麗な心は、私に愛を示しているとは言えませんが、しかし、私が彼女を愛さないでいられましようか。どうして彼女を愛さないでいられましようか。友よ、まじめな話をしましよう。私は瑞華を愛しているが、それは母のように愛しているのであり、姉のように愛しているのです。今はそれとは違う異性へのあこがれを感じています。友よ、私はあくまで人間だから、ナザレのイエスではありません。アショーカ王<sup>\*19</sup>でもありません。私がこの世界で愛欲を追求すること、その権利がないとは決して言えないでしょう。私は妻と子供を棄てました。私は無慈悲ですが、両方を満足させる方法がありませんでした。私の無責任さによる過酷な罰は、今でも受け続けています。

お菓子はやはり甘すぎました。私は花壇公園にもどったところで、食べ残した二つを、とうとう食べることができませんでした。私はお菓子を鉄の檻にいる

---

\*18 初出本には「――朋友、日本的一角小洋是只能換十個銅板的呢。」の一文がない。

\*19 アショーカ王 アショーカ (Asoka、前268頃～前232頃) は、古代インドで栄えたマウリヤ朝第3代の王。仏教を守護したことで知られる。ここではナザレのイエスと同じく、禁欲的な生活を送った人物として挙げられる。

二羽の白鶴に投げました。汚れなき白鶴だけが彼女から授かった二つのマナ<sup>\*20</sup>を味わう資格があると思ったのですが、白鶴は食べようとしません。私は鶴たちを恨み、呪いをかけました。やつらは奢り高ぶった似非君子だ！やつらが身につけている白い羽毛をむしりとり泥の中に投げ込めないことが恨めしい。やつらの羽毛をむしりとったら、ガチョウやカモと一緒にではないか？ おまえはなんと傲慢なのか？ おまえはなんてうぬぼれが強いのか？ 私は白鶴を叱りつけたのですが、時間はなかなか過ぎません。私は花壇巷のあたりをぐるぐるまわり、また彼女の窓の前を行ったり来たりしましたが、障子はずっと閉じたままでした。私は彼女に会いたくて仕方ありませんでしたが、その一方で恥ずかしくて会うのが怖くもありました。彼女は16, 7歳くらいでしょう。私は彼女よりも十歳は年上で、彼女の父と同世代になってしまいます。時間は本当に経つのが遅い。学校に歩いて行くより他なくなりました。学校の芝生の上に寝転んで、学生たちが野球をしているのを見ていました。芝生の一本一本のやわらかい草は彼女の睫毛であり、空気中にある一切のきらめくものは彼女の瞳なのだ。瞳、瞳……。彼女は私の魂を完全に支配しました。……やっと夕暮れ時になり、身を起こして家に向かいました。しかし、私は直接海岸から帰らず、花壇巷をまわっていきました。私は遠くから彼女が玄関で料理をする姿を見ると、ふたたび心の底から戦慄しました。彼女は私の足音を聞いたようで、ふりかえって私を見つめたのです。私は心の底から耐えられないほどの震えを感じました。——ああ、友よ<sup>\*21</sup>、彼女と初めて会った日はこのような興奮にありました。いま思い出しても、非常に幸運だったと思っています。彼女の名前を、私は知らないのです。彼女の売っているカルメラは、おそらくスペイン語のカラメロ<sup>\*22</sup>を語源とします。私はこのカルメラという発音を美しく感じたので、スペイン式の呼び名にならって、彼女のことを「カルメラ娘」<sup>\*23</sup>とネーミングしました。私は彼女にスペイン女性の洗礼を受けさせたことになりましたが、彼女の心がスペイン女性と同じだとは信じていません。友よ、知っているでしょうか？ スペインの女性は、最もむごいことをするのです。私は何かの本で、ある物語<sup>\*24</sup>を読んだことがありました。それはスペインの少女

---

\*20 マナ 原文は「*manna*」。郭沫若の自注には「天から授けられた食べ物。『旧約聖書』「出エジプト記」にモーセは人々を率いて、砂漠を進行する際、上天が「マナ」を下された。」とある。

\*21 初出本には「——啊，朋友，」の句がない。

\*22 カラメロ 原文は *Caramelo*。スペイン語で、「飴」の意味。

\*23 カルメラ娘 原文は *Donna Carméla*。「喀爾美萝姑娘」のことを指す。

\*24 初出本には「事情」とあり、全集本は「故事」と改訂。



にプロポーズする男性の話です<sup>\*25</sup>。少女は乗馬用の鞭をふりあげて25回男性を打つと、ようやく結婚の承諾となります。男性は喜んで上着を脱いで背中を出し、少女の鞭を受けます。ところが、少女は24回打った後で、鞭をとめました。男性は戦慄して最後の鞭打ちを待ちながら、成就後の恋愛の楽しみを想像しました。しかし、25回目の鞭はとうとう振り下ろされませんでした。25回目の鞭打ちがなければ、少女は結婚を承諾したことになりません。彼女の24回の鞭打ちで男性の背中は傷だらけとなり血の跡がそこら中に広がっていました。少女は鞭を投げ棄てると、にっこりほほ笑みながら去って行きました。——これはスペイン女性の典型で、アジアではおそらく未だかつてないものです。私は戯れにスペイン式の洗礼を彼女に受けさせましたが、彼女の心はスペイン女性のようになるわけではないことを信じています！ ああ、友よ、私はすでに彼女から目に見えない鞭打ちを24回受けてしまいました。私の性格は彼女によって壊され、私の靈魂と肉体も腐敗させられました。私の学業は彼女に放棄させられ、家庭も彼女のために離散させられました。私はいま彼女の心情がどのようなのか分かりませんが、この消そうとしても消すことのできない幻の美をしきりに追い求めてしまっていました。25回目の鞭打ちよ、はやくこい。私は彼女から「愛している」と聴くことができれば、たとえ死んでも喜んで望むことでしょう！

本来は同じ街であり、また同じ時間であるのに、楽園と地獄が転換するのは本当にあつという間です。私が住まいに戻ると、長女はドアを開ける音を聞いて、遠くから走って迎えてくれました。部屋に入ると、私の瑞華がまだ満一歳の息子を背負いながら、台所で夕食を準備している姿が見えました。厳粛な静けさにあるその光景は、かえって私の心に強い負担を与え、私は急に威厳ある聖堂に入ったかのように感じていました。私はもう涙が出そうでした。心のなかで懺悔しました。私は妻の足下にひざまずいて泣きたかったのです。今日の彼女に対する裏切りを懺悔したかったのです。でも私はなにかの牽制を受けたようで、良心の発現によってその行動をとることができませんでした。夕飯が済むと、電気の下で談話が始まりました。妻は私に今日何の本を読んだかと訊きましたが、私は考えることもなく嘘を話し出しました。スペインの作家ブラスコ・イバニェス<sup>\*26</sup>の『裸体の美女<sup>\*27</sup>』を読んだと言いました——これはかなり前に読んでいました——私はぼんやりと覚えている内容を三分の一ほど語りました。ここまでが読んだとこ

---

\*25 スペインの少女にプロポーズする男性の話 未詳。

\*26 原文は Blasco Ibáñez。ブラスコ・イバニェス（1867～1928）はスペインの作家。

\*27 原文は La Moja Desnuda。ブラスコ・イバニェスが1906年に創作した『裸体の美女』のこと。

ろで、明日か明後日までにはすべて読み終えると言いました。妻はいつもと同じように、目の輝きのなかに喜びと感謝の感情が現れていましたが、それがまた私に不安と僥倖を抱かせました。一日が終わり、私たちは抱き合って寝ました。瑞華を抱きしめながら、内心ではスペインの少女を思っていました。彼女の睫毛、彼女の瞳、彼女のすべてを想像しました。すべて、ああ、私はなんて悪魔なのだ！

私は二人を比べてしまったのです。瑞華の顔を、君は知っているでしょう。まるで夢の中の人物であり、深遠な白い光に包まれているかのようです。でも、少女の方はスポットライトを浴びているかのよう目を引くのです。瑞華の表情は雨あがりの秋山のように、とても静かで厳かですが、少女はバラ色の春がすみのように、さらに具体的に言うと、瑞華は中世の神聖な絵画であり、少女は古代ギリシャの彫刻に近代的な色彩が加わっているかのようです。私は聖母像を抱きながら愛欲の夢にかられていました。ああ、私の自我の分裂、二重生活の表現は、ここから始まったのです！

友よ、春は本当にうっとりするものです。古代の詩人たちは「春」で女色を表現し、「春」で酒を表現しました。彼らの感覚は本当に鋭敏で恐ろしいものです。ある晴れた春の日、郊外に出かると想像しよう。立ちこめる霞はピンク色にただよい、まるでお風呂あがりの乙女の柔肌のように、あるいは天上天下すべての存在は酒に酔っているかのよう、すべては愛欲に燃えており、すべては息吹が感じられるものです。宇宙こそ最大の春画です。青春の血潮がまだ脈を騒がせている人たちなら、おそらく私のこのような話を酷いとは思わないでしょう。それに日本の春は、桜が満開を迎えており、まさに人の魂を奪っていくのです。私はちょうどその時期に彼女に出会いました。彼女に出会って以来、毎日の午後に一銭のお菓子を買に行きました。夜家に帰ったら、瑞華をあざむくために嘘をつきます。忠実な瑞華は一度も私を疑ったことはありません。あれは彼女に出会った五日目でした。私が路地に行くと、遠くから見ても彼女の路地近くの雨戸<sup>\*28</sup>が閉まっていました。私はびっくりして、彼女の家か彼女自身に何か悪いことが起こったのではないかと心配しました。彼女の家近づくと、中から何かを叩く音が聞こえました。彼女の背が曲がったおばあさんが出てきました。彼女も背を曲げ

---

\*28 郭沫若の自注には「日本の住宅には、固定された壁以外に、住居の窓の外側に取り付けられた動く板がある。これらの板は取り外すことができ、夜間や家に誰もいないときには閉め、昼間に開く。これを「雨戸」と呼ぶ。これらの取り付けられている形式の板は、二十枚ほどあり、使わないときは壁に設置された「戸袋」に収納され、使うときは「戸袋」から順番に引き出される。」とある。なお、初出版には「窗門」とあり、全集本は「雨戸」と改訂。

ながら、何かを整えている様子でした。彼女はおそらく私の足音を聞いたのか、私が通り過ぎる時に顔をあげ、私に会釈しました<sup>\*29</sup>。彼女はいつもより華やかな服を着ていて、顔に白粉を塗っていました。彼女たちはきっとどこかに行くのでしょうか。私は近くのすみっこに隠れており、彼女が出てくるのを待っていました。遅れて出てきた彼女は、私が通り過ぎたところを遠望しました。私がすみっこから飛び出すと、彼女は私に微笑みかけました。彼女は祖母を支え、ゆっくりと向かい側に歩いていきました。私は路地のまんなかで彼女を目で見送りました。彼女は数歩あるいたあと、振り返りました。私がそこに立っているのを見ると、恥じらいながら私に会釈しました<sup>\*30</sup>。また数歩あるいた後、振り返りました。私がまだそこに立っているのを見ると、恥じらいながら満面の微笑みを浮かべて、私に会釈しました<sup>\*31</sup>。少し歩いてまた振り返りました。彼女によって私の心臓は痛いほどドキドキさせられ、両手でしっかり胸を抑えました。私が見た彼女の足下も、しっかり立っていない様子でした。私は追いつきました。大通りまで追ったのですが、彼女はもう振り返りませんでした。彼女は祖母を支えて電車の駅まで歩き、私も駅まで歩きました。彼女たちは電車に乗り、私も追って電車に乗りました。彼女がきまり悪そうにしているのを見ると、私はあまりにも彼女に迷惑をかけたくなくて、電車のなかでは彼女の遠くに座りました。私は一銭で三区までのチケットを買いました。電車が私を乗せて走り出すのに任せました。彼女が降りるところまで連れて行ってくれたなら、私はすぐに降りる様子でした。ただ彼女が三区を越えるところに行くだけが心配でした。一区を通過しましたが、彼女たちは降りません。また二区を通過しましたが、彼女たちは降りません。ああ、危ない、危ない、もう一区で降りないと。私はせっかく来たのに無駄になってしまいます。一駅着き、また一駅。第三区でした。彼女たちは降りる様子はなさそうです。私は絶望しました！ 私は立ち上がり電車を降りるほかありませんでした。私はわざと彼女の前を通り過ぎたのですが、彼女はかわいそうな表情で私を見ました。私はとても言いたかったのです、お嬢さん、私は一銭しか持っていないので、あなたを目的地まで見送ることができません。どうか許してください、と。

——「はやく！はやく！」

車掌<sup>\*32</sup>は私に電車を降りるよう促されました。私は立って見てるだけでした、私より力の強い電車が愛する人を奪っていくことを。自分が爆弾を持っていない

---

\*29 初出本には「向我行了一礼。」とあり、全集本は「向我點了點頭。」と改訂。

\*30 初出本には「向我行了一礼。」とあり、全集本は「向我點了點頭。」と改訂。

\*31 初出本には「向我行了一礼。」とあり、全集本は「向我點了點頭。」と改訂。

\*32 郭沫若の自注には「日本では電車の運転手を車掌と呼ぶ」とある。

ことが悔しかった。私は電車を粉々に爆発したかった。車掌も粉々に爆発させてやりたかった！彼女と一緒に死にたかった！電車が見えなくなるまで、私はじっと立っていました。彼女はいったいどこに行ったか分かりません。彼女が戻ってくることを十分に理解していますが、いつ戻ってくるのか分かりませんでした。この別れは永遠の別れみたいでした。私はしょんぼりとほとんど絶望し、ずっとF市の街をたどりながらH村に戻りました。十里あまり<sup>\*33</sup>の道のりを歩きました。私は花壇巷に戻り、また彼女のドアの前を通り過ぎました。ドアには二枚の張り紙がありました。一枚には「郵便物は北側の公会堂へ」とあり、もう一枚には「新聞配達は一時停止」とありました。筆跡は非常にエレガントで、彼女以外、ほかの人には書けないものです。友よ、彼女の年齢はまだ16、7歳くらいで、日本のお金持ちの家の娘だったら、その年齢の時にはまだ高等女学校<sup>\*34</sup>に通っています。彼女は小学校を卒業しただけなのに、字がこんなにもきれいでした！盗みたいという心が沸き起こってきました！路地に誰もいないうちに、ドアから二枚の張り紙を剥がしました。家まで走り、同じ内容のものを二枚書きました。瑞華が何に使うのか尋ねるので、私は近くの漁師のためだと嘘をつきました。また米粒<sup>\*35</sup>を2つ盗んで、彼女の家まで走っていき、新しい張り紙を貼りました。

（ちょう たくげつ / Zhang Zhuoyue ・ 博士課程 1年）

---

\*33 十里あまり 中国の里程を用いており、当時の一里は約400m。「十里あまり」で約4km強。

なお、中国では1929年に「一里＝500m」と定められた。

\*34 高等女学校 初出本・全集本はともに「高等女学」と表現。初出本は「高等女学」の下に、郭沫若の「男子の中学校に相当」という注釈がある。

\*35 米粒 白米は粘着力があるので、糊代わりに粘着剤として使われた。